

梓を決心したにちがいない。なお本書の基本となった諸論文によって、著者は昨年一月に千葉県医師会医学会学術奨励賞を受賞している。さきの日医の最高有功賞といい、今回の県医学術奨励賞といい、至極当然の受賞といふべきであろう。古希をすぎてもなお、このような内容の重い著書を矢継ぎ早に刊行された著者のエネルギーには、あらためて心からの敬意を表するものである。

なお蛇足ながら、まだ『病いの克服』をよんでおられない向きには、本書とともに、この書を併読されることをあらためてお願いしたい。

(深瀬 泰且)

〔審書房出版、千葉県流山市流山二二二九六一五、電話〇四七—五八一〇〇三五、二〇〇四年二月一日、A五判、二七六頁、本体二五〇〇円〕

編集後記

五〇巻二号をお届けする。当号には原著三報・研究ノート一報のほか、資料・記事・書籍紹介を掲載することができた。本誌は以前より日本学術振興会の刊行補助金を受けてきたが、一昨年度に打ち切られ、昨年度に補助が再開されたが、今年度は再び打ち切られてしまった▼補助期間中は年間総ページ数が規定され、審査を経た論文を次年度送りとするしかなかった時もあつた。補助がないことはページ数制限がなくなり、審査済み論文を迅速に

掲載できる利点もある。一方、発行費を押し上げ、補助のない学会台所を苦しめてしまう。悩ましい問題だが、次年度から再び補助が得られるよう、編集委員会も一層尽力したい▼ところで会員諸氏におかれては、横浜・鶴見での総会を終えたばかりで、まだ印象鮮やかと拝察する。私も神奈川地方会の会員としてお手伝いさせていただいた。今回は演題数の多さから二会場となり、パソコンソフトによる発表も二〇題を越えた。これらにより些かの混乱が生じ、演者・座長の双方にご迷惑をおかけしたこと、この場を借りて会員諸氏に陳謝申し上げる▼他方、演題数の増加は本会の発展の象徴であり、まことに喜ばしい。これは新入会員の発表が増えたためであり、それゆえパソコンソフトによる発表も増加したと思われる。総会は学会の一大行事であり、今後はこうした新潮流への十分な対応の必要性を痛感した▼ちなみに先号は総会抄録号だったが、執筆者の多さと締切から発行までの時間等の問題で、編集委員が全ゲラ校正を例年分担している。それゆえ今年も多くの演者が不本意な誤植を指摘されていたが、当事情を拝察いただき、なにとぞご容赦願いたい▼さて本誌編集委員会の重責を長年努められた深瀬委員長、および小曾戸・新村の各委員が前号で退任され、替って蔵方・坂井・西巻の各委員が新任された。中西・瀧澤・町・真柳の各委員は留任となったが、本誌の向上と発展に編集委員会一同尽力する所存なので、会員諸氏のご鞭撻と一層の投稿をお願い申し上げます。

(真柳 誠)